愛媛県外泊の石垣集落の変遷と修復システム*

The formation of ishigaki landscape using locally produced stone on Sotodomari in Ehime*

三宅正弘**・庄野武朗***・市川宏規****
By Masahiro MIYAKE***　Takeaki SHONO***　Hironori ICHIKAWA****

１．はじめに

愛媛県西南端の西海町外泊地区（平成16年現在世帯数44戸）は，北斜面の斜面地に形成された漁業集落であり，冬の北方向からの季節風（西北風）と「しまき」（潮を含み吹きつける潮風）を防ぐために形成された石垣の集落として，以前から保存のための調査が行われている．昭和50年に西海町教育委員会が「外泊石垣集落　伝統的建造物群保存調査報告書」をまとめており，また同53年には財団法人観光資源保護財団から「観光資源調査報告VOL.6外泊の石垣集落　集落景観の保全と再生」がまとめられている．それらには，石垣の実態とともに民家建築の調査が行われ，保全に向けての方策が書かれている．しかし，外泊地区は，保存地域などの地区指定は受けておらず，それ以降の調査もなく，変遷を含めた保全の実態を研究した報告はない．

そこで本論では，今後の保全に向けて必要となる石垣の修復について，その主体を含めた修復の変遷とともに現在の修復実態について明らかにしていきたい．

２．防風壁と基礎石垣

外泊の石垣は，風を防ぐための「防風壁石積」と，斜面地に形成された集落であるゆえの「敷地基盤石垣」とが双方形成されている．それらが連続していることで，石垣に存在感を与えている．その石材は，造成時に出土した地場のものが使われ，防風壁と基盤石垣ともに，石積みの工法はコンクリートを使用していない「空積」となっており，造成初期は「手がえ」（集落の人の手による）によって造成されたとされている．

写真1.西海町外泊地区全景

このなかで防風壁石積の呼び方は，地元では，外側と内側との両側に石を積むために「二重」と言う用語で，敷地基礎石垣と使い分けられている．

また，この二重の積み石の間，そして敷地基盤石垣における「裏ごめ」に使う「ぐり石」（割栗石）についても地元では「あんこ」という用語が定着している．

このように実際には，外泊の石垣には，防風壁と基礎石垣とがあり，その修復にはそれぞれ個々で考察しなければいけない．防風壁の高さは，造成時の民家が平屋であり，1階軒先の高さ以下でであるが（一階建物の壁を，石の防風壁がとり囲み，建物外観は屋根と，窓の部分だけ石垣が取り除かれた「海賊窓」が特徴），他方で，基礎石垣の高さは，3メートルを越えるものも多く規模が異なる．さらに防風壁は，壁の自重の耐震のみを考えればよいが，基礎石垣はそうでない．両者では修復作業の規模が大きく異なる．これまで南海地震などで倒壊したのは防風壁の方であり，基盤石垣の大規模な修復は行われずにいる．

しかし，基盤石垣も初期造成時に形成されたも

*キーワーズ：修復　石垣　石積み
**　正員，工博，徳島大学工学部建設工学科
***　学生員，徳島大学大学院工学研究科建設工学専攻
**** 非会員，徳島大学工学部建設工学科
（徳島県徳島市南常三島町2丁目1番地
TEL088－656－7578，FAX088－656－7579）

のが，ほぼ今日まで継承されているものと考えられ，かなりの年月を経ている．また，先の報告書で，作者が判明している唯一の石垣が「故吉田七蔵氏が17才の時に築いた石垣」であり，七蔵氏（弘化4年生）の17歳時が文久1年であることから，造成期は江戸時代末期までであると考えられる．それゆえに現在の基礎石垣は，ほとんどが100年以上を経過している．

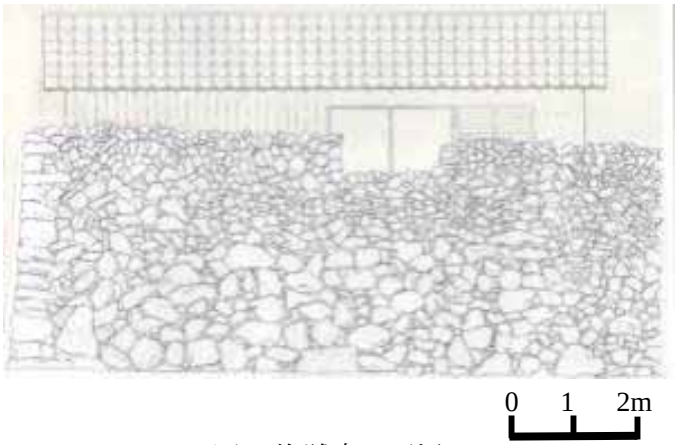

図 **1.**海賊窓の石垣

３．歴代の石垣職人

これらの石垣は，主に「手がえ」といわれる地域居住者の仕事によるものとされているが，特に基盤石垣の要所は，技術力をもった主体が行ったものと考えられよう．そのなかで，作品の作者が記録されているのは吉田七蔵氏（弘化 4 年 7 月 15 日生～昭和 14 年 5 月 3 日没）であり，外泊集落において，近年まで居住者に語り継がれていることからも，新規の造成で石垣を根石（最も下部の石）から天端石（最上部の石）までを積み上げた石垣造成期の最終期の職人と考えられる．

それ以降，この集落における石垣施工は，台風や地震などの災害による石垣の修復作業となるが，それは基盤石垣ではなく，防風壁が主体となってくる．時代的に七蔵氏の次の担い手は，勇松吉（いさみまつきち）氏（明治 28 年 4 月 3 日生～昭和 52 年 5 月 7 日没）である．

造成後，全戸が入居したのが明治 12 年とされていることからも，勇氏の仕事は，年代から考えても，造成後の防風壁が中心であろう．勇氏の仕事は，現在の集落居住者へのヒアリング調査においても多く聞かれた．

そして勇氏の次にこの集落の修復を担っているのは吉田清一氏（民宿経営・昭和29年3月10日生）である．

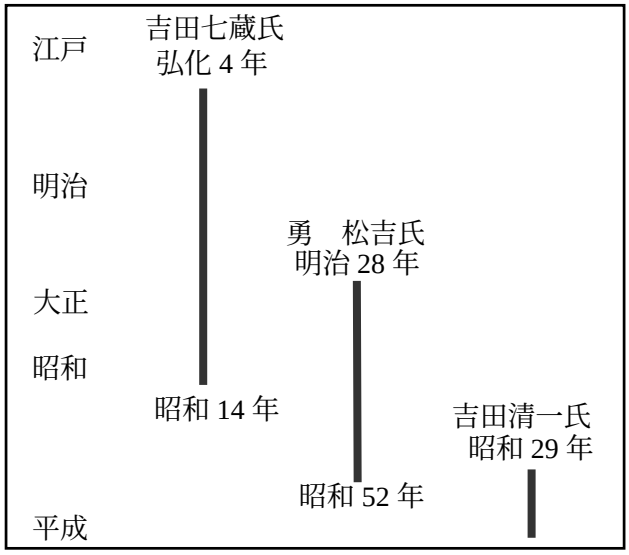

図 2．外泊地区歴代の石垣職人

このように外泊地区の石垣は，初期造成期には多くの人々が石積みに関わったと思われるが，造成後は，台風や地震で主に防風壁が崩れるたびに勇松吉氏や吉田清一氏が，ほとんどの場合，「手がえ」ではなく，一人で修復を続けてきた．いずれの職人も，集落居住者であり，集落内で次々と人材が継承されてきている．

またこの地区には，居区の周辺に，石垣による段々畑が形成されており，集落造成時から世帯ごとに造成されたが，防風壁など住区の宅地の石垣に対して畑の石垣には，以上のような高度な技術をもった人々だけでなく，他の集落居住者も石積みを行っていた．だが現在は，畑の石垣や防風壁などは，台風等に傷みが生じる毎に吉田清一氏によって修復が行われている．

４．結び　景観継承に向けて

以上のように居住者によって石垣の景観が維持されてきた．そして近年の展開として，2名の居住者（民宿経営者と区長代理）が吉田清一氏とともに修復を行い，人材育成が行われている．また土木系大学の学生への石垣指導もすすめられている．さらに体験型観光のプログラムも検討されており，今後の新たな修復システムづくりが期待できる．このシステムについては次報告で示す．